

子供をして勞作を重ん ぜしむべし

雨峰生

日本人の持つて居る缺點は幾つかあらうけれども、其の中の一つは確に勞作を輕んずる風であらうと思ひます。此の風は其の關係する所が非常に大であつて、一國一家の盛衰消長にも關係するであらうと思ひます。兎角日本人の理想は勞作とか活動とか積極的のものでなくて、安逸とか樂隱居とか消極的に傾き易い傾向を持つて居る。よもや一時勞作をなし、活動をするも、そは目的にあらず理想にあらずして、安逸を求め、樂隱居をしようとする方便、手段に過ぎない。随つて安逸を得られ、樂隱居をなし得る地位に達すれば、全然今までの方便手段たる勞作活動をすてしまつて、無事逸樂を貪る風があるやうに思はれます。歴史を緋いて見ますると、政權を得やうとつとめ、兵馬の權を得やうとつとむる間こそ、相當に活動を

なし、相當に勞作をもすれ、一旦之を得たる以上は、我が目的既に達せりとばかりの風にて、それ以上に善良なる活動をなし、善良なる勞作をなし、社會全般に好影響を與へやうと努むるものすらないのが随分目につくでありましょう、それ故に初代や二代位は其の位置を保つてが出来るけれども、永く續けることが出来ない。甚しい例になると、當代ですら既に其の位置を持ち續けることが出来ずに、事を任せたる臣下に實權を奪はれてしまふやうなのがある。吾々はどうしても是等の弊害に鑑みて、家を興し、國を興す所以の勞作を重んじ、活動を重んずるを理想として進まなければならぬ。逸樂を求め、樂隱居を理想とし、只之に達する手段方便として勞作活動をなすといふ風を廢止せねばならぬ。若しも我々の議論にして大した間違がないとしたならば、我々は幼児教育に對して、一つの要求を提出したい。それは外でもない。幼兒をして大に勞作を重んずる風を盛ならしむべしといふ事である。成る程現今幼稚園に於ては、折紙細工をさせるし、豆細工をさせるし、粘土細工

其の他種々のををさせる、小學校に於ても手工を加へておく所なども、大分多くなつて來たやうであるから、是等は喜ぶべき現象であるとして大に歡迎するけれども、まだまだ、社會の全般に此の勞作を重んずべしといふ風が瀰漫し渡らぬ以上、兒童の間に此の思想が十分にしみ渡らぬのは無理ならぬ事である。都會の少年殊に中流以上のものを伴ひて郊外に遠足を試みんか、彼等は農夫を輕蔑し、之を呼んで土百姓となし、農夫が粒々辛苦の骨折をつくして、培養したる作物をふみわらして平氣になつて居る。彼等はやもとより惡意あるものではないけれども、勞作の重んずべきを知らなから、随つて勞作する人をいやし、他人の勞作の結果を輕んずるのである。これは一例をあげたに過ぎぬけれども、かやうな例をあげたらばとても數へきれぬ程多いとであらうと思はれる。かやうな状態であるから、幼稚園なり、學校なりに於ては此の勞作の鄙しむべからざるのみならず、否却て大に重んずべきであるといふ思想を十分に鼓吹して貰ひたい。しかし、かういふ事は學校な

り幼稚園の力なりでは十分に行くものでない。家庭に於ても氣をつけて、苟も機會があつたならば、之をとらへてこの思想を鼓吹し、勞作を實際やらせて習慣とならせねばならぬ。家庭と學校と共力して事をすれば、子供に對して最も有効であるが、若しも互に相背反するやうな事があれば、當に効なきのみならず、寧ろ大害のあるものである。此の勞作をさせるに就ては學校と家庭とは是非とも一致してやつて貰ひたいものである。さて今までは學校教育を受け、多少文字を讀むとの出来るものは、何事をやらせても教育を受けぬものよりは、成績の好かるべき筈であるし、又如何なる仕事にでも仕事に就くに都合好かるべき筈であるのに、却て反對の現象を見受けるのは實に遺憾な次第である。即ち學校の教育を受けたものは、徒に氣位のみ高くなつて、十分勞作に身を入れぬものもあるし、中には殆ど遊んで暮らして居るものさへある。是等は實に國家が學校を設けて、幾多の教育ある人間を出して、國家有用の材にしようとする主旨に反するし、又各父兄が學校に送つて教育を

受けさせやうとする主旨にも反ひて居る現象であ
ると私は考へます。これはまだ勞作を重んずべし
といふ思想が、社會一般に行きわたらぬと、教育
社會にも此の思想を鼓吹するとの不足な處から、
起つて來た變現象であらうと思ひます。我が日本
の國の地位から考へて見ましても、生存競争の非
常に激しい點から考へて見ましても、これからの
日本人は、どうしても相當に教育を受けて居つて、
しかも此の勞作を重んずる風がなくてはならぬと
思ひます。さうするには、たとひ富める家の子供
であらうが、素封家の子供であらうが、自分の額
に汗して食ふの覺悟がなくてはならぬと思ひま
す。況や普通の家の子弟に於ては、申すまでもな
い事である。それゆゑ家庭及び學校などでは、是
非とも此の思想の鼓吹にとめて貰ひたいと思ひ
ます。さて其の方法は、種々ありましようが、先
づ子供をして自分の事は自分で始末させる習慣を
つけるのが第一の急務かと思ひます。然るに我が
國の人の子供に對する仕方を見るに、近來大に面
目を更めて來たにもかゝはらず、まだ十分に此の

習慣がついてないやうに思はれます。また雇人と
いふやうなものがあつて、一切萬事少年子弟の世
話をするを、忠勤を抽んづるのであると心得、却
て之を害しつゝあると知らないものが澤山ありま
す。それ故に子供に自分の身の始末をつけさせる
には、どうしても雇人まかせではうまく参りませ
ん。主婦が自身受け持つに限りませす。また性急に
かやうな習慣をつけやうと思つてもとても、出來
るものではありません。始終氣をつけて居つて永
い間にやうやう得られるものであります。また此
の習慣をつけるのは、容易なやうで決して容易な
事ではありません。主婦自ら模範を示し、實踐躬
行しなくてはなりません。若しも主婦が一切萬事
雇人まかせにしてをきながら、子供にだけさうい
ふ習慣をつけやうとしても駄目であります。子供
は非常に活動性に富んでは居るけれども、其の反
對の性質、樂を好む性質も持つて居りますから一
旦雇人を使役するの安樂なるを知つた以上は、隨
分これを應用するであらうと思ひます。次には子供
の出來る範圍の家事を手傳はせるが好いと思ひま

す。子供ははたらくを好みませすから、仕事が出
来た時に褒め言葉をかけてやらう者なら、其の次
には喜んで手傳を致します。何處の家庭に於ても、
子供に手傳はせる仕事の無いといふ事は無い筈で
す。若しも子供に手傳はせる仕事がないといふ主
婦があるならば、其の人は教育の思想に乏しい人
といふべきであらう。子供にそんな手傳をさせる
のは、まだるくて面倒である。それよりか自身の
手を下した方が大へん埒が明いて早くてよいとい
ふお方もあらう。かういふ人は子供を教育して行
く資格に缺乏して居るといふてよからう。一躰子
供の教育といふ者は面倒であるべき筈だ。その面
倒を見るのがいやなやうでは、とても子供の教育
は出来る筈のものではない。さて如何なる家事を
手傳はせるかは、其の家庭の状況と、子供の男
性女性或は長幼如何によつて色々相違があらうと
思ふからこゝにはいはいはない。たゞ一つ言つておか
なければならぬのは、學校に行くやうな子供であ
ると、學科の復習以外に自分のすべき仕事はない
かのやうに考へて、恰も遊ぶのは自分の權利なる

かのやうに思つて居るものゝあると、父兄など
のうちにはまたそれを當然の事と思つて居るもの
ゝある事である。實に間違つて居るもの甚しいも
のである。これは多分教育を受ける目的、學問を
する標的を誤解したから起るものであらうと思ふ。
成る程學校へ通つて居る間は、學問は子供の仕事
であるから、無論全力をつくして之をやらせべき
は言ふまでもないが、しかし學校でやる事は學問
の總べていもないが、教育の總べてでもない。
我々は子供が學校の事が何もかも好く出来るから
とて、それで十分満足すべきではない。彼も亦家
庭の一員であるから、其の家庭の一員としての職
務を十分に盡させなければならぬ。之までがよく
出来て、我々は始めて満足を表してよいと考へる。
然るに従來學校に於ても家庭に於ても、此の點に
關する注意が缺如して居たやうに見受けられた。
されば學校を卒業したものゝ中に、徳富蘇峰氏の
謂はゆる書を書く遊民がだんだんふえて行くの
は、止むを得ぬ次第といはなければならぬ。この
弊害を救ふには、どうしても少年子弟をして、學

校の學科を復習する傍、家事の手傳をさせて、勞作の重んずべきを知らしめるに限る。或は平常に於ては、十分手傳はすといふのは出來ぬかも知れぬが、暑中休暇とか、冬季休業とか永い休暇を利用して、家事の手傳をさせ、勞作の經驗を得しめ、人間實務の一端を知らしめるがよいと思ふ。次に人は機會があつたならば、紙なり、絲なり、醬油なり、色々の工業製作品の製造せらるゝ有様を見せるがよいと思ふ。昔徳川光圀は侍女どもが紙を大切にしないで、粗末にして困る所から、一日暇をとらせて紙の製造所を參觀させた。侍女どもはどんなに面白い處が觀られるだらうかと思つて、多大の興味を以て行つて見た處が、面白い處か、其の製造せらるゝまでの骨折苦勞といふものは一通りでない。紙といふものはかやうな骨折の結果出來るものかといふことがわかつて、侍女どもは歸つて來て後、紙を大切に於て來て、光圀の參觀させた目的が美事達せられたといふ事である。我々は子供に對して此の光圀の故智を用ひるがよいと考へる。それ故に機會があつたならば之を利用し、

若し無かつたならば、子供の爲であるから、寧ろ機會を作つてまでも製造所製作所を參觀させるがよいと思ふ。其のくせ幼児に見せるには大仕掛の器械工業よりは成るべく舊式の簡單な物の方がよい。さうすると製造工業に關する智識を増すのみならず、勞作を重んじ、又他人の勞作の結果なる品物を大切にするといふ習慣を得て、一舉兩得であると思ふ。以上簡單ながら如何にして勞作を重んぜしむべきかといふ方法を説いた積りである。どうか教育の任務にたづさはつて居る人は、其の家庭であると學校であるを問はず、此の事に力を盡していただきたいと考へます。(完)

